

研究発表

地理的分野研究発表

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求 ～地理的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

熊本県上天草市立龍ヶ岳中学校 教諭 岸谷 祐太郎

1 はじめに

龍ヶ岳中学校のある上天草市龍ヶ岳町は、全域を雲仙天草国立公園に指定されており、天草富士とも呼ばれる龍ヶ岳からは美しい海に浮かぶ天草や鹿児島島の島々に加え、遠く阿蘇山も望むことができる。このような豊かな自然に囲まれながら、本校では1年生20人、2年生26人、3年生17人が、学校教育目標「独立自尊～自立への一歩～」のもと、自立に向けて日々の勉学に励んでいる。

さて、龍ヶ岳町をはじめ天草全体が抱える大きな課題は、少子高齢化や過疎化に伴う人口減少である。特に、龍ヶ岳町内の高齢化率は年々高まっており、限界集落の目安である50%を超えている地区もあるほど厳しい現状である。この現状を目の当たりにし、「天草で生まれ育った一人として、社会科教員の一人として私にも何かできることはないか」という熱意が年々高まっていった。

そのような折、令和3年度熊本県中学校社会科教育研究大会で地理的分野の公開授業を行う機会をいただいた。本研究を通して、生徒に民主主義の担い手として必要な資質・能力の素地を育みたいという思いで研究に取り組んだ。

2 研究主題との関連

まず、本校生徒には右の資料1の通り、「天草のことは好きだが、将来も天草に住み続けようとは考えていない」という実態がある。天草を離れたい主な理由は、「不便」、「娯楽がない」、「進学先や就職先が少ない」といったものであり、天草に対してネガティブなイメージを持っている生徒が多いと感じたため、天草を少しでもポジティブに捉えてほしいという願いがあった。

そこで、研究主題の「民主主義の担い手に必要な資質能力を育む社会科の探求」に基づき、地理的分野において、地域的特色を捉え、過疎化や高齢化など地域的課題に向き合う学習を通して、今できること、そして将来できるであろうことを提案することで、地域の一員として積極的に社会参画する意欲や態度が育つような授業を構想した。

そして、研究主題の掲げる新しい視点に照らし、目標は単元終了時に生徒に期待する姿を目指し、内容は実生活に関連した資料を関連付ながら、方法は自分の将来に応じた天草（郷土）との関わり方を提案することと捉え、授業づくりを始めた。

また、副題に関して、特に身近な地域（天草）と他の地域（中国・四国地方）を関連付ける単元構成や、実生活に関連した資料の活用、天草の課題の調査・プレゼンテーション作成などの手立てを行えば、生徒の学習意欲（主体性）が高まり、「問い」を引き出すことができると考えた。

あなたは、天草のことが好きですか。

17/17人

好き	どちらかというと好き	あまり好きではない	好きではない
9人	6人	2人	0人

中学校卒業後、あなたはどこで生活をしていると思いますか。

A:進学や就職、その後も、ずっと天草に住み続ける。	1人
B:進学や就職で1度天草を離れるが、いつか天草に戻ってきたい。(Uターン)	5人
C:進学や就職で天草を離れ、そのまま天草に戻ってこない。	11人

資料1 生徒への事前アンケート（一部）

3 研究の仮説

中国・四国地方での学びを基に、郷土である天草の地域的特色や課題を捉え、今の自分と将来の自分にできる「地域おこし」を提案することができれば、地域住民の一員として主体的に社会参画しようとする意欲が高まり、民主主義の担い手に必要な資質・能力を育むことができるであろう。

(1) 「民主主義の担い手に必要な資質・能力」の捉え方について

熊本県中学校教育研究会社会科部会では、「民主主義の担い手に必要な資質・能力」を次のように捉えている。

よりよい社会と幸福な人生をつくり出すために、社会の問題に気付き、多様な他者と共に社会の諸問題の解決に向かう態度および公正に判断する力。

上記の内容を踏まえ、本実践では、生徒の「よりよい郷土にしたい」、「自分の夢も大事にしたい」という思いを基に、郷土の課題に気付き、自分にもできる「地域おこし」をクラスメイトやゲストティーチャーらと共に考える活動を通すことにより、社会の諸問題と主体的に向き合う態度や公正に判断する力の育成につながるであろうと考えた。

4 研究の視点

研究の視点にそったイメージ図は、図2の通りである。

(1) 目標：何ができるようになるか

本単元の学習が終了した際に期待する生徒の姿は、次の通りである。

「交通・通信網」の整備が地域の産業や人口などと深い関係をもっていることを理解し、過疎化や高齢化など地域の課題に向き合う学習を通して、地域住民の一員として主体的に社会参画しようとする生徒。

上記のような生徒に近づくためには、単元を通して主体的に学ぼうとする意欲が必要である。そのため、天草の現状や課題と共通点が多い中国・四国地方を関連付けた単元構成にすることで、自分事として課題を捉えさせることに重点を置いた。

(2) 内容：何を学ぶか

内容に関しては、「教科書を学ぶ」ではなく「教科書で学ぶ」ということを念頭に、実生活（郷土）に関連した資料の活用や調べ学習を通して、新たな知識・技能を主体的に獲得させることに重点を置いた。

(3) 方法：どのように学ぶか

方法に関して、天草の課題を調査する活動では、複数の資料を基に地理的な見方・考え方を働かせて得た「問い」についてプレゼンテーションを行ったり、自分の将来像に応じた多様な視点から考察させたりすることに重点を置いた。

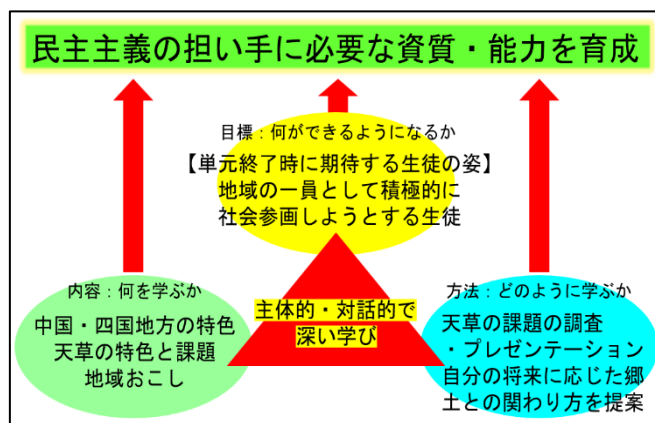


図2 研究の視点イメージ図

5 研究の実際

(1) 目標：何ができるようになるのか

①単元を貫く課題の設定（第1次）

中国・四国地方の人口増加率や龍ヶ岳町の高齢化率（資料3）、事前アンケート（資料1）の結果を比較することで、次のような気づきが生まれた。

生徒A：「中国・四国地方と龍ヶ岳町には同じ課題がある。」

資料3 龍ヶ岳町等の高齢化率

生徒B：「自分の進路選択が、高齢化や過疎化と関係があるけど、自分の将来も大事。」

生徒C：「もし天草を離れても、郷土は1つしかないし、大切に思う気持ちは変わらない。」

生徒D：「郷土が衰えるのは悲しいという感情は、私たちも中国・四国地方の人たちも同じ。」

このような生徒の気づきを集約する形で、単元を貫く課題は次のように設定された。

『それぞれの郷土と「ずっと関わり合っていく」ためには、どんな「もの・こと・ひと」が必要なのだろう』

②単元構成の工夫

先述した「単元を貫く課題」を解決する中で、「単元終了時に期待する生徒の姿」に近づくために、中国・四国地方の学習を生かして天草の課題解決に迫る単元構成（資料4）を行った。

中国・四国地方は、天草と同じ過疎化や高齢化という共通の課題を抱えている。この2つの地域を、交通や通信網を中核として産業や人口、地域間の結びつき等の視点で関連付けて学習することで、生徒の学びが深まると考えた。

時間	過程	主な学習内容
1次	課題把握	単元を貫く課題の設定
2～5次	課題追究① (中国・四国地方)	交通・通信網を中核に、中国・四国地方の地域的特色と課題を考察
6～7次	課題追究② (天草)	天草の課題を交通・通信網、人口ピラミッド、高齢化率に着目し調査
8次 (本時)	課題解決	自分の将来像に応じた「地域おこし」を提案

資料4 本単元の流れ

(2) 内容：何を学ぶのか

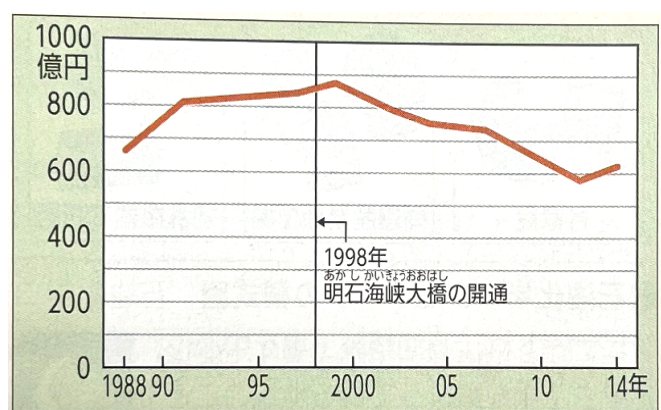
①実生活と関連した資料の活用（第3次）

第3次の学習では、ストロー現象を学ぶ過程において、八代・天草シーラインの実現を目指すポスター（資料5）と徳島市の小売業の年間商品販売額の変化（資料6）を関連付けることで、「交通網の発達にはデメリットもあるのではないか」「八代・天草シーラインが実現したら、自分たちの生活にどんな影響があるのだろうか」といった「問い」を持たせることができた。

現在：龍ヶ岳町
～八代市
所要時間約90分
↓
実現後：龍ヶ岳町
～八代市
所要時間約30分
約3分の1に短縮



資料5 八代・天草シーラインのポスター



資料6 徳島市の小売業の年間商品販売額

②実生活と関連付けた調べ学習（第5次）

第5次では、中国・四国地方における地域おこしの例やそれを支える交通・通信網の重要性を学んだ後、「天草ではどんな地域おこしができそうか、また、交通・通信網の発達にはどんな課題があるか」をテーマに調べ学習を行った。その結果、龍ヶ岳町を舞台にした映画があることや龍ヶ岳町内には交通網の発達を願った看板が多数設置してあることなど（資料7）、生徒にとって新たな学びがあった。



資料7 龍ヶ岳町内の交通網関連の看板

（3）方法：どのように学ぶか

①天草の課題に関する調査・プレゼンテーション（第6次～第7次）

ア 高齢化率と交通・通信網

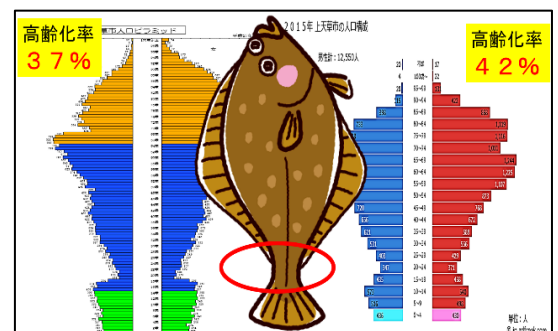
「なぜ、槌島だけ高齢化率が50%を超えているのだろう。」龍ヶ岳町の高齢化率（資料3）を基に、生徒が感じた「問い」である。実際に槌島に住む生徒がこの課題を調査し、「スマホ等の電波が入らない地域が、他の地区より多い。」「槌島大橋が唯一の交通網で、道幅が狭く不便。」という現状を捉えることができた。これは龍ヶ岳町内に限らず、天草全体に生じている交通・通信網の未発達による格差という課題を考えることにつながった。



資料8 槌島大橋

イ 人口ピラミッド（過疎化）と進路選択

天草の人口ピラミッド（資料9）を目にするなり、「これは何型ですか。」という「問い」が生まれた。既存の知識である富士山型やつりがね型、つぼ型とは異なるため、生徒たちにより「ヒラメ型」と名付けられた。そして、「なぜ、15歳から急に人口が減っているのだろう。」という、天草の人口ピラミッドの特徴に迫る「問い」をもつことができた。この現象の理由が、本校生徒と同様に高校進学を機に天草を離れる若者が多いためであることに気がつき、改めて天草の課題を自分事として捉えることにつながった。



資料9 天草の人口ピラミッド

ウ 地域おこしと交通網の整備

天草の観光客数と観光消費額の推移をまとめたもの（資料10）から、年々増加傾向にあることに気がつくと共に、「なぜ、H30年の方がR1年よりも増加幅が大きいのだろう。」という「問い」が生まれた。増加した理由は、新天草一号橋の開通と崎津集落の世界遺産登録による影響が大きいという結論に至り、地域おこしと交通網の整備の関連性を実感できた。

	H29年	H30年	R1年
観光客数	163万人	187万人 +24万人	190万人 +3万人
観光消費額	114億円	133億円 +19億円	146億円 +13億円

資料10 天草の観光客数、消費額の推移

②多様な視点からの考察（第8次（本時））

ア 生徒自身の将来像に応じた課題追究

第8次（本時）では、学習課題を『天草とずっと関わり合っていくためには、どんな「天草おこし」が必要なのだろう』と設定した。生徒たちが主体的に課題を追究できるように、自分の将来像に応じて「天草おこし」（天草のための地域おこし）を考えさせた。Aの立場を選択する生徒がいなかったため、2つの視点からの追究となったが、追究する立場を自己決定させたことで活発な意見交換や議論につながったと感じられた。生徒が選択した将来像の内訳（資料11）と「天草おこし」の主な方法（資料12）は次の通りである。

	単元の学習前	本時の導入時
A：進学や就職、その後も、ずっと天草に住み続ける。	1人	0人
B：進学や就職で1度天草を離れるが、天草にUターンしたい。	5人	10人
C：進学や就職で天草を離れ、そのまま天草に戻ってこない。	11人	7人

資料11 生徒が選択した将来像

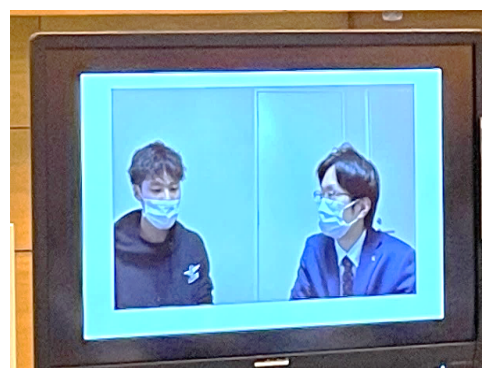
B：Uターンしてできる「天草おこし」	C：天草を離れてもできる「天草おこし」
・習得した知識や技能、資格を生かす。（建設業、通信業、看護師、教員） ・自分の経験や考えを生かす。（伝統文化の継承、市議会議員に立候補）	・天草産の商品を買う。（消費者） ・天草の商品を売る（広める）。（経営者） ・天草でイベントや旅行を企画する。 ・有名人になって天草をPRする。

資料12 生徒が考えた主な「天草おこし」

イ GTの活用

第8次（本時）では、生徒に異なる視点を与えるために、GTへのインタビュー動画（録画）を活用した。

GTには、生徒と同じように都会の生活に憧れて天草を離れた体験や都会に住んだからこそ感じた天草のよさ、天草を活性化するために若い世代に求められる役割などについて具体的なエピソードを話していただいた。特に、「天草は子育てに向いていること」や「地域とのつながりが深いこと」など、郷土のよさについて新たな視点から考えることができた。



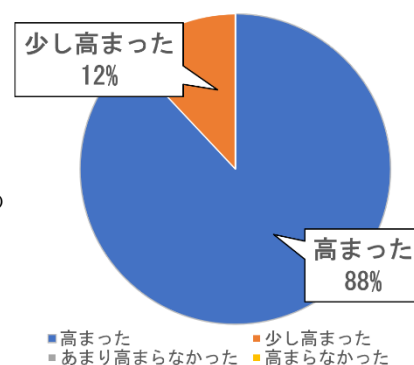
資料13 GTインタビュー動画

6 成果と課題

（1）目標：何ができるようになるか

本実践の終了後に、「郷土（自分が住む地域）への関心は、どの程度高まったか」をアンケート調査すると、生徒全員の関心が高まったという結果（資料14）から、先述した単元の学習終了時に期待する生徒の姿に近づけたと考えられる。

課題としては、生徒が考えた「天草おこし」を単元を貫く課題に即して「必要なもの・こと・ひと」に分類する活動を行えば、より深い学びへとつながったのではないかと感じた。



資料14 事後アンケートの結果

(2) 内容：何を学ぶか

単元全体を通して身近な地域（郷土）と関連付けながら学んだことにより，どの程度学習内容が定着したのかを検証するために，単元テスト（学習の達成（新学社））の結果を本実践の前後で比較した。その結果は，次の通りである。

	本実践以前の平均点	本実践後の平均点
知識・技能	約 130 / 170 点	約 138 / 170 点 (+8 点)
思考・判断・表現	約 18 / 30 点	約 20 / 30 点 (+2 点)
合計	約 148 / 200 点	約 158 / 200 点 (+10 点)

上記の結果から，身近な地域（郷土）と関連付けた実践は効果的と判断できる。しかし，他の単元でも同様の実践が可能なのかという課題がある。また，身近な地域（郷土）と関連付けることを優先して，本来学ぶべき内容が疎かにならないよう留意する必要がある。

(3) 方法：どのように学ぶか

先述した通り，事前アンケートでは郷土に対してネガティブな考えが強かったが，本時の終末時における記述（資料 15）から，郷土のよさについて地域の環境条件や地域間の結びつき，人間の営みと関連付けていると捉えることができる。これは，地理的な見方・考え方を働かせることで生まれた「問い」について，多様な視点から追究する活動を積み重ねたことにより生徒の考えが変容したと考えられる。

GTの活用方法については，より多くの視点を生徒に与えるという点で課題が残った。本実践では，ご自身が天草にUターンされた野村さんにのみ御協力いただいたが，天草に住み続けられている方や天草を離れられたままの方，天草に移住された方など多様な立場の方々にご協力いただくことで，より深い学びへとつながったのではないかと感じた。

③同じ立場を選んだ ・ <u>違う立場を選んだ理由は何ですか？</u> 。天草には天草しかない良さがあり，それをとらえさせることなく つなげていきたいと思った。天草の豊かな自然や歴史的 建造物や文化は移動させることができず，天草に根を 感じたいと思った。
③<u>同じ立場を選んだ</u> ・ <u>違う立場を選んだ理由は何ですか？</u> 在学中一度天草に出たほうが，可能性が広がるし， 地域を活性化させるには，知識や経験が必要 だと思った。

資料 15 本時のワークシート（一部）

7 おわりに

本実践を終えて，研究主題である「民主主義の担い手に必要な資質・能力」を育むことができたかという点で振り返ると，概ね達成できたと考えられる。それは，「それぞれの郷土が大事という気持ちは今も未来も，どの地域でも同じ」，「将来どの地域に住んでも，自分が住む場所だからいい町にしたい」といった生徒の発言や記述から，主権者としての一步を踏み出せたと感じたからである。

また，本実践で活用した「住民が願い続けてきた道路」が，本年6月4日に開通した。自分たちが学んだ内容が住民の声で実現したという経験は，社会参画への意欲の向上につながると思われる。

最後に，本実践に関わってくださった全ての方々に感謝を申し上げ，結びの言葉としたい。